



高等学校の入試制度および通学区制度の社会的・心理的影響に関する調査研究：神戸第3学区と西宮学区を中心に

土屋, 基規
船寄, 俊雄
添田, 久美子
久保, 富三夫
齋木, 俊城

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 9(2):79-88

(Issue Date)

2002

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000474>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000474>



高等学校の入試制度および通学区制度の社会的・心理的影響に関する調査研究 —神戸第3学区と西宮学区を中心に—

土屋基規 船寄俊雄 添田久美子 久保富三夫 齋木俊城

A Research Study on the Social and Psychological Influence of High School Entrance System on Students

Motonori TSUCHIYA, Toshio FUNAKI, Kumiko SOEDA, Fumio KUBO, Toshiki SAIKI

1 はじめに

本研究グループは、文部科学省の科学研究費補助金を受けて実施された「21世紀に向けての子どもの発達環境に関する総合的研究」(1998年度～2000年度、基盤研究(B)(2)、課題番号10410069、研究代表者：土屋基規)の一グループとして、標記主題のテーマで研究を重ねてきた。その最終報告は、2001年3月に刊行された上記科研の研究成果報告書にすでに収録済みである。最終報告に至るまでに本研究グループは3回の中間的な報告を行ったが、簡単にその経緯を記しておこう。第1回は、1999年9月4日に玉川大学で開催された日本教育学会第58回大会での研究発表である。その成果は、『神戸大学発達科学部研究紀要』第7巻第2号(2000年3月31日発行)に標記主題の題目で収録されている。

第2回は、2000年3月31日付で刊行した中間報告書である。この中間報告書に関しては、アンケート調査にご協力いただいたことへのお礼の意味を兼ねて、関係諸団体の意見を聴取した。聴取した関係諸団体は、兵庫県高等学校教職員組合(2000年7月14日聴取)、兵庫県教育委員会(2000年8月4日聴取)、神戸市教育委員会(2000年9月14日聴取)である。

第3回は、2000年7月8日に開催された兵庫県教育科学研究会第25回総会での研究報告である。

いずれの報告に対しても様々に有益な意見をいただき、それらを踏まえて先の研究成果報告書が作成することができた。

しかし、本研究グループは、最終報告書刊行後、調査地域のうちでもっとも興味深い特徴を示した神戸第3学区と西宮学区を取り上げ、より踏み込んだ分析を行う必要性を自覚した。そこで、改めて当該通学区に関するアンケート調査の結果をさらに精密に分析するとともに、当該通学区の教師(中学校・高等学校)、保護者の方々の意見を聴取した。そしてその成果を、2001年6月23日に開催された兵庫県教育科学研究会第26回総会および、2001年8月29日に横浜国立大学で開催された日本教育学会第60回大会で報告した。本稿は、この2回の研究報告のまとめである。(船寄 俊雄)

土屋 基規 神戸大学発達科学部教授 (教育科学論講座)
船寄 俊雄 神戸大学発達科学部助教授 (教育科学論講座)
添田久美子 神戸大学非常勤講師
久保富三夫 神戸市立楠高等学校教諭 神戸大学非常勤講師
齋木 俊城 兵庫県立神戸高等学校教諭

(2001年10月29日 受付)
(2001年11月1日 受理)

II アンケート調査の概要

調査は、1998年度兵庫県下における各通学区の公立中学校卒業生数をもとに(神戸第3学区8392人、西宮学区3800人)、800人に対して中学校1校を抽出し、当該の中学校2年生1クラスに調査を依頼した。公立全日制普通科高校については学区内の中学校数をもとに、地域差、学力差なども考慮に入れ、当該校の高校1年生1クラスに調査を依頼した。中学校については1999年3月、高校については1999年5月(一部10月)に質問紙法で調査を実施した。以下は、今回の報告で取り上げる神戸第3学区と西宮学区についての調査結果の概要を示す。()内の数字は回収率である。

①中学校

	協力校数	生徒数(回収率%)	保護者数(回収率%)
神戸第3学区	7	232 (92.4)	251 (74.9)
西宮学区	4	131 (92.3)	107 (75.4)

②高校

	協力校数	生徒数(回収率%)	保護者数(回収率%)
神戸第3学区	4	154 (95.7)	153 (95.0)
西宮学区	3	118 (98.3)	109 (90.8)

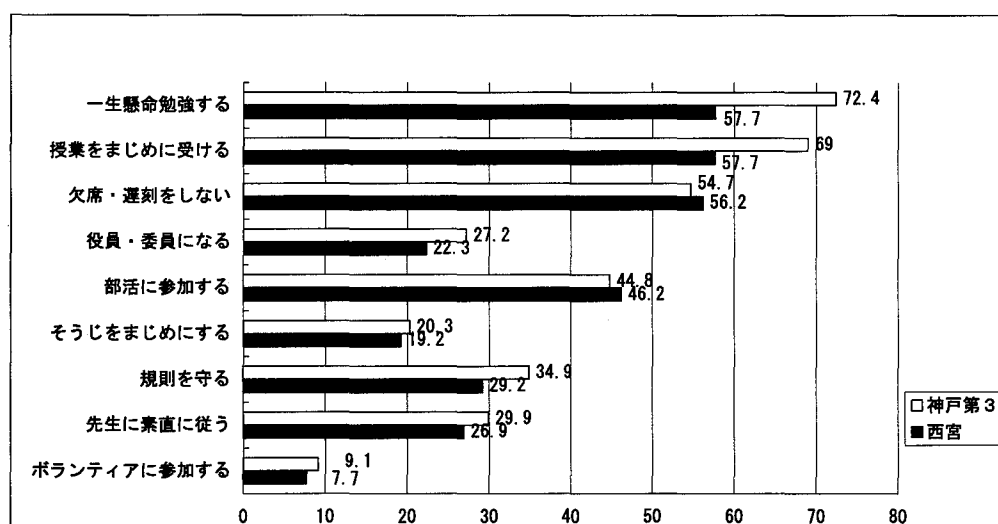
III 中学生の回答から考える入試制度と通学区制度の心理的影響

1 入試を意識して心がけていること

(1)入試を意識して心がけていることにみる相違

「入試を意識して学校生活で心がけていること」を9項目について尋ねた。それぞれの項目で「心がけている」と回答した割合(複数回答)を示したのが、図表1である。神戸第3学区と西宮学区を比較すると、「一生懸命勉強する」と「授業をまじめに受ける」で差が認められた。

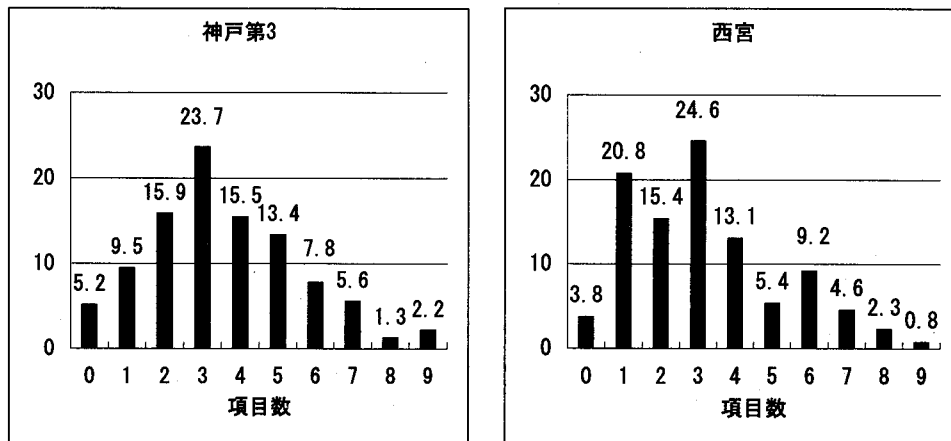
図表1 入試を意識して心がけていること



(2) 選択項目数の比較

「入試を意識して心がけている」と回答した項目が多いほど生徒の意識はさまざまなことに向けられていると考えられる。そこで、選択項目数の分布状態を示したものが図表2である。なお、平均値は神戸第3学区3.57項目、西宮学区3.18項目であった。

図表2 項目数分布

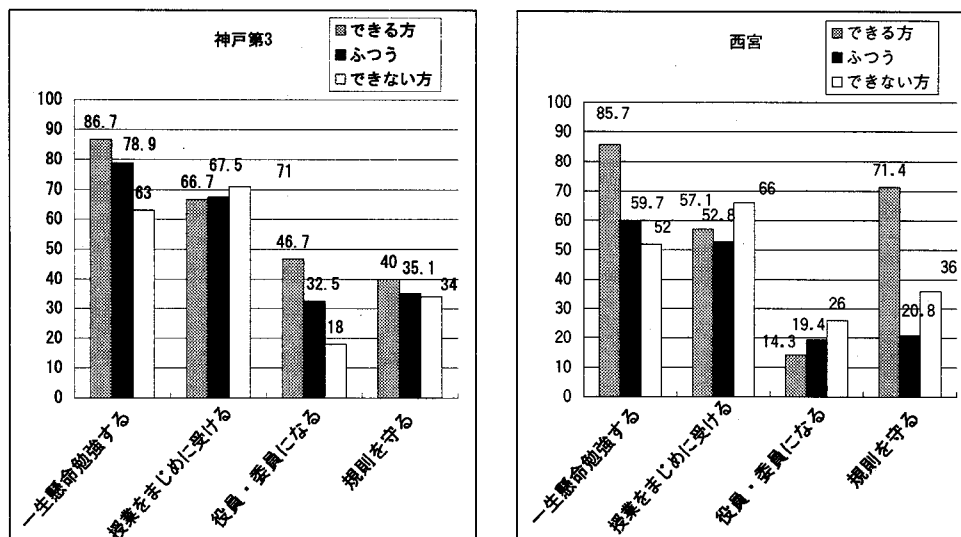


2 学力層と入試の影響

学力層によって入試・通学区制度の与える影響に違いがあることはこれまでも言及されていることであるが、単独選抜制度と総合選抜制度のそれぞれで、各学力層にどのような意識の違いを生じさせているのであろうか。ここではその点について分析を行った。

学力層については、「学校で勉強ができるほうだと思うか」(「できる方だと思う」、「ふつうだと思う」、「できない方だと思う」)に対する回答をもとに3つのグループに分け(通学区による有意差は認められていない)、「入試を意識して心がけていること」とのクロス集計を行った。

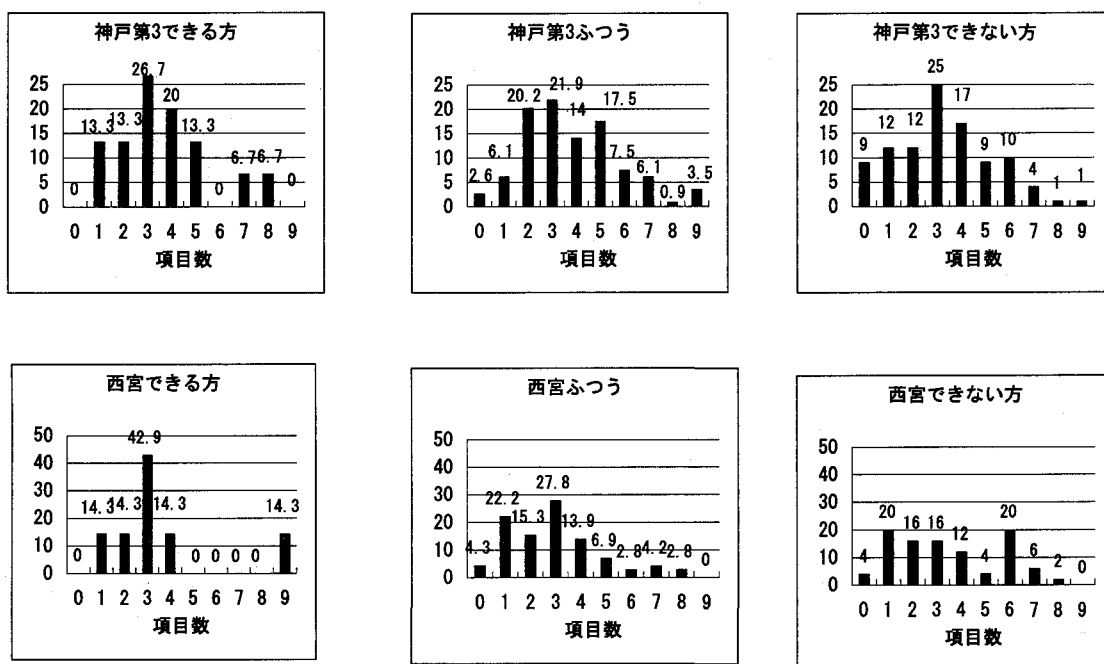
図表3 通学区別・学力層別にみた入試を意識して心がけていること



「入試を意識して心がけていること」の項目のうち学力層によって差が認められるであろうと予測される項目について通学区別に比較したのが図表3である。実際に差が認められたのは、神戸第3学区では、「一生懸命勉強する」、「役員・委員になる」、西宮学区では、「規則を守る」であった。

つぎに、通学区ごとに学力層別に項目数の分布を示したのが図表4である。神戸第3学区と西宮学区ではその分布状態に大きな違いがあることがわかる。平均項目数では、神戸第3学区は、「できない方」と回答した生徒の層が3.29項目と最も低く、「ふつう」3.80項目、「できる方」3.67項目であった。西宮学区では「ふつう」と回答した生徒の層が2.94項目と、「できない方」3.46項目あるいは「できる方」3.57項目と回答した層に比較して低いことがわかる。

図表4 通学区学力層別項目数の分布



3 考察

(1) 神戸第3学区の特徴

神戸第3学区の場合、単独選抜制度というだけでなく、通学区内に普通科高校数が多い(11校)という状況が強く影響していると考えられる。高校数が多ければ選択肢が多いというプラス面もあるが、その反面、少しの差で進学する高校が異なるということにもなる。

入試を意識して心がけていることで、「一生懸命勉強する」や「授業をまじめに受ける」の項目で高い割合を示しているだけでなく、項目平均値も高い。入試を強く意識し、学力以外にもあれもこれも大切と感じているという生徒の状況が数値にあらわれており、それは、インタビューにより得られた内容とも合致するものである。さらに、その影響を学力層別にみると、「ふつう」あるいは「できる方」と回答した層ほど意識が強く、「できない方」と回答した生徒にとっては、入試に向かってなんとか努力しようという意欲が持ちにくい状況を生み出していると言えよう。

(2)西宮学区の特徴

西宮学区は、入試を意識して心がけるということにおいては、調査学区ではもっとも意識が低いと言えよう。それは、総合選抜制度ということだけでなく、運用面の影響も大きいと考えられる。西宮学区では、志願校で上位10%以内に入った生徒のみが志望優先されるが、残り90%は居住地によって近隣の高校に振り分けられる。選択の自由は少ないが、公立高校合格圏内に入っていれば、進学する高校はほぼ決まることになる。生徒は合格圏内に入っているという比較的ゆるやかな目標をもち、3年生1学期中までに54.8%が志望校を決定しているという状況にある（図表6参照）。そのため、のびのび生活しているが、よい意味での緊張感も乏しいと考えられる。とくに、「ふつう」と回答した層にとってはこのことが言えるであろう。

しかし、その一方で、「できない方」と回答した層、とくにボーダーライン上と思われる生徒にとっては、努力の余地はかなり残されている反面、強いプレッシャーも感じることになる。また、「できる方」と回答した生徒の一部にとっても、この状態が好ましいものとは言えないようである。それは、私立中学校への進学率が約15%、また私立高校への進学希望が約15%と他学区に比べ高いこと、通学区における現行の公立高校入試方法を変えてほしいと望む生徒が44.5%と高いことにおいても現れている（図表9参照）。生徒や保護者がその近隣の公立高校への進学を望まない場合は、大阪などの私立高校にも通学可能であるという地理的利点もあって、小学校の早い時期から進学塾に通うなど経済的、精神的負担を強いられることになるのである。（添田久美子）

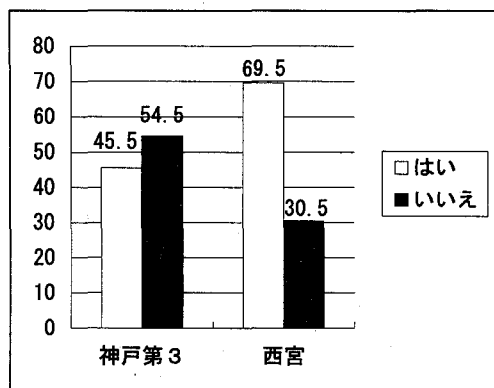
IV 高校生の回答から考える入試制度と通学区制度の心理的影響

1 神戸第3学区の特徴

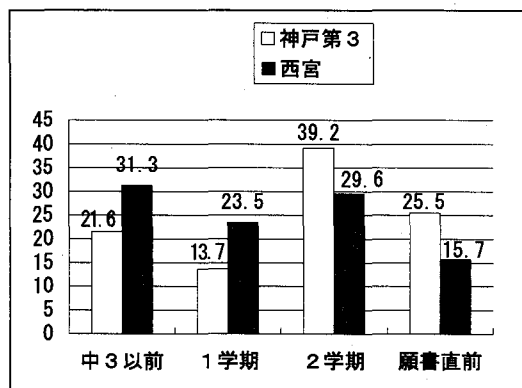
(1)志望校決定時期の遅れ

図表5および図表6は、それぞれ「いま在学している高校は、中学3年の1学期頃に希望していた高校か」、「いま在学している高校に進学を考えた時期は次のどれか」という設問についての回答結果を示したものである。図表5で特徴的なことは、神戸第3学区では54.5%と半分以上の生徒が、中学3年生の1学期頃の希望と異なる高校に進学していることである。これに対して西宮学区ではその割合が30.5%であり、両学区の間に大きな差がみられる（他の通学区は概ね西宮学区と同様の水準である）。

図表5 中学3年の1学期頃に希望していた高校か



図表6 在学高校に進学を考えた時期



さらに、図表6から、神戸第3学区では、中学3年生の3学期になってから志望校を決定した生徒が約4分の1を占めていることがわかる。この原因は、神戸第3学区が単独選抜学区の中で、姫路・福崎学区に次いで普通科高校数の多い通学区であるためである（姫路・福崎学区は14校、神戸第3学区は11校）。しかし、姫路・福崎学区と神戸第3学区では地域性に大きな違いが見られる。姫路・福崎学区では、通学の便や地域との歴史的つながりもあって、地域の高校としての性格が神戸第3学区の各高校より強い。したがって、神戸第3学区は、兵庫県下で普通科高校が最も学力により序列化されている学区であると言える。さらに、普通科以外の学科・高校もその序列化の外にはないので、実際にはもっと複雑な階層が形成されている。このため、学力のわずかな変動でも志望校の変動を余儀なくさせることに結果するのである。

(2)入学時における満足度の格差

神戸第3学区の各校ごとの回答を比較してみると、高校間の格差が顕著に現れている。入学した生徒の52.5%が中学3年生になる前からその高校への進学を希望し、82.5%が「入学してよかった」と回答している学力最上位の伝統校が存在する一方で、入学した生徒のうち、中学3年生になるまでに進学を希望していた生徒が皆無の高校も存在する。この高校では生徒の45.5%は、願書提出直前になってようやく受験を決めている。「入学してよかった」と回答している生徒は57.6%である。

このように中学生の希望が特定の高校に集中するのは、「在学している高校はどの点でよかったか」（複数回答）と「在学している高校はどの点で不満か」（複数回答）の回答状況をみると理解できる。学力上位の伝統校ほど「学力・技術」、「雰囲気」、「部活動」などへの満足度が高く、「校則が厳しすぎる」、「誇りが持てない」、「進学に不利」という不満が少ない。一方では、その対極に位置する先のような高校もある（このあたりに位置づけられた高校の教員の努力・苦労は尋常ではない。また、高校生活を通して生徒が大きく変化することを報告者は十分認識している）。「大学進学実績がよく自由な学校」と「大学進学実績が振るわず校則の厳しい学校」を両極として、その間に少しずつ異なる高校が存在する。中学生の志望は自ずと前者の極方向に偏り競争が激化することになる。

2 西宮学区の特徴

西宮学区に見られる特徴は、公立ボーダー層への入試圧力が強いということである。

単独選抜制度と総合選抜制度とを比べた場合に、通常、中学生にとっては前者の方が高校入試の心理的圧力が強いと受けとめられる傾向がある。前述の中学生の回答結果においても、全体としてはそのような傾向が認められた。しかし、高校生に対する「中学校の時、高校入試を意識して心がけていたこと」という設問への回答結果では、西宮学区の方が強く意識されており、中学生の回答結果と矛盾するものとなっている。この点についていかに考えるべきであろうか。

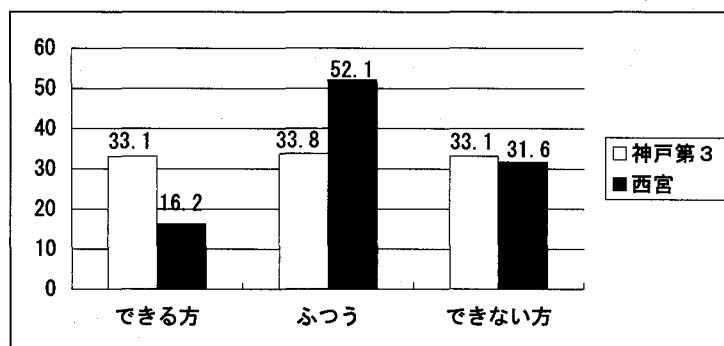
高校生の学力層の分布状態を「中学校では勉強ができるほうだったと思うか」への回答結果からみると、図表7に示したように神戸第3学区と西宮学区とで大きな差異があり、このような学区差は中学生ではみられなかったものであり、このことに留意する必要があると考えられる。そこで、学力層別に「中学校の時、高校入試を意識して心がけていたこと」という設問への回答結果を分析したのが図表8である。

これによると、とくに、西宮学区の「できない方」と回答した生徒の意識率が高いことがわかる。神戸第3学区の同じ層の生徒との比較では、「欠席・遅刻」、「先生に従う」、「部活動」、「そうじ」の各項目において、西宮学区の方が意識率が高い。これは、西宮学区においては、総合選抜制度の定員枠内に入れるかどうか大きな岐路であることから、公立高校進学希望者中の学力下

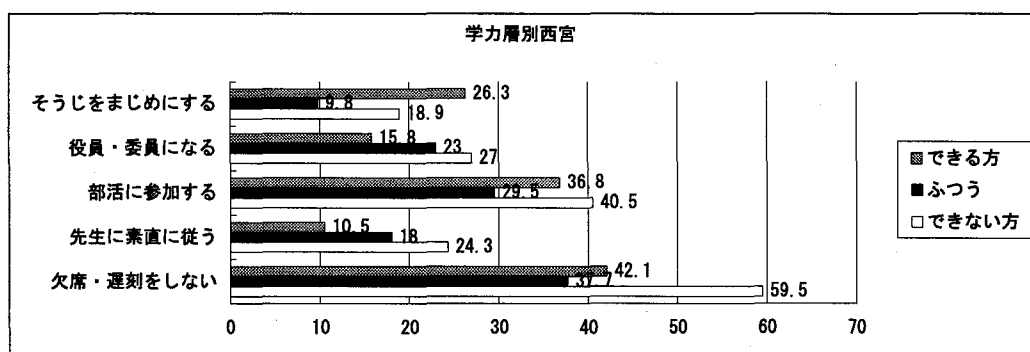
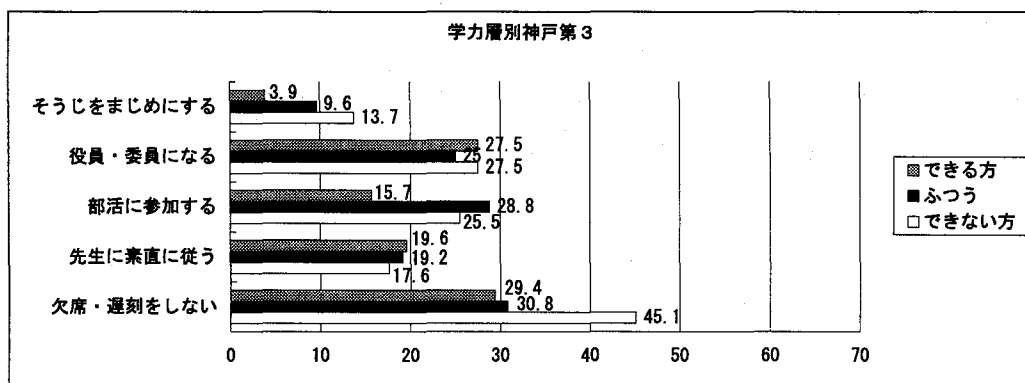
高等学校の入試制度および通学区制度の社会的・心理的影響に関する調査研究 —神戸市第3学区と西宮学区を中心に—

位層にかなり強いプレッシャーを与えているものと考えられる。また、「生徒会や学級の役員になる」ことを意識している者は、神戸第3学区は、どの学力層においても27%前後であるが、西宮学区の場合は成績上位層においては意識率が低く、学力層が低下するほど高くなる。この結果も、両学区の入試制度を反映しているものと思われる。(久保富三夫)

図表7 中学校では勉強ができるほうだったと思うか



図表8 学力層別にみた入試を意識して心がけたこと



V 入試制度に対する中学生と保護者の意識

1 現行の入試制度に対する意識

「現在の通学区で行われている公立高校入試のやり方についてどう思うか」という設問に対して、中学生と保護者は図表9のとおり回答している。図表9からは通学区による差は現れてこない。

しかし、「勉強ができる方だと思うか」（保護者に対しては、「あなたのお子さんは」が付け加わる）という設問とのクロス集計である図表10では、通学区による差が明確に現れてくる。

図表9 現行の通学区の入試制度についてどう思うか

通学区・回答者 回答	神戸第3学区		西宮学区	
	中学生	保護者	中学生	保護者
今のままでよい	26.2%	14.1%	27.3%	15.7%
どちらともいえない	34.9%	42.2%	28.1%	36.3%
変えてほしい	38.9%	43.8%	44.5%	48.0%

図表10 学力層別現行の通学区の入試制度についてどう思うか

通学区・回答者 回答		神戸第3学区		西宮学区	
		中学生	保護者	中学生	保護者
今の ままで よい	できる方	60.0%	22.9%	14.3%	0.0%
	ふつう	26.3%	15.4%	27.8%	17.5%
	できない方	26.0%	2.1%	27.5%	20.8%
どちら ともい えない	できる方	26.7%	37.1%	28.6%	31.6%
	ふつう	41.2%	39.4%	41.7%	41.3%
	できない方	30.0%	50.0%	47.1%	20.8%
変えて ほしい	できる方	13.3%	40.0%	57.1%	68.4%
	ふつう	31.6%	43.3%	27.8%	34.9%
	できない方	41.0%	45.8%	23.5%	54.2%

西宮学区では「できる方」だと回答している生徒・保護者ともに現行入試制度の存続を支持する比率は非常に少なく、変更を支持する比率が非常に高い。「できない方」だと回答している保護者の場合も、過半数の保護者が入試制度の変更を支持している。「できる方」だと回答する生徒・保護者にとって、現行の総合選抜制度（志望優先10%）は、「学校選択の自由がない」、「地域の高校に進学できない」という点から支持されていないと考えられる。第1に、完全な小学区制ではなく、入試の結果（志願校への志願者数とその志願者の成績の分布状況）により、志望が達成できるかどうかかわらず、居住地優先方式の入学校が年度により変わることがある。現実には中学校の指導により志望優先10%枠による志願を行使することは困難である。

第2に、居住地優先方式と言いながらも、高校の立地が偏っているために、必ずしも近隣の高校に入学できるとは限らず、交通機関が多少とも利用できれば、非常に遠い高校を指定されるということがある。

神戸第3学区では、「できる方」だと考えている生徒は、現行入試制度の存続を支持する比率が高い。これは成績上位の生徒にとっては、現状のまま推移することが高校進学にとって有利である

と評価するからであろう。逆に「できる方」だと考える保護者が変更を支持するのは、もっと有利な入試制度の出現を期待するからであろう。変更を支持する生徒の比率は、「できない方」だと考える生徒の方が高い。現状を自分にとって不利と評価するからであろう。現行の入試制度が成績により有利・不利な状況をひきおこすと、生徒が評価している現れであろう。

2 入試改革に対する意見

入試制度改革として「学力検査」、「調査書」、「推薦入試」、「面接」、「複数志願」、「複数受験」、「全県学区」、「希望者全入」、「中高一貫」の9項目のそれぞれについて、必要か不必要か問うた設問への回答結果を示したものが図表11である。

神戸第3学区では複数志願・複数受験の項目について、生徒・保護者ともに非常に高い割合で導入を希望している（複数志願については県教委は2003年度入試より神戸第3学区への導入を発表している）。これは、現行制度の「輪切り」状態に対する不満の表れであろう。西宮学区では、現行の総合選抜制度という枠のなかで、これらの制度を具体的な制度としてとらえにくいので、第3学区と比較して、必要と考える比率が低いと考えられる。

これら2つの通学区の入試制度改革に対する考えの違いは、それぞれの通学区で実施されている選抜制度の違いと評価するだけではなく、その選抜制度を取り巻く様々な環境・要因を分析する必要がある。（齋木俊城）

図表11 入試改革が必要だと思うか

通学区・回答 項目・回答者		神戸第3学区		西宮学区	
		必要	不必要	必要	不必要
学力検査	生徒	38.9%	34.5%	34.1%	36.4%
	保護者	56.9%	14.4%	59.8%	13.1%
調査書	生徒	43.0%	24.8%	32.8%	34.4%
	保護者	47.3%	16.0%	51.4%	13.1%
推薦入試	生徒	48.2%	7.0%	50.4%	14.0%
	保護者	47.3%	6.4%	43.9%	4.7%
面接	生徒	26.9%	34.8%	35.1%	32.8%
	保護者	40.4%	12.8%	39.3%	9.3%
複数志願	生徒	83.0%	3.0%	58.8%	5.3%
	保護者	74.5%	5.3%	67.3%	3.7%
複数受験	生徒	76.6%	6.1%	59.7%	7.0%
	保護者	75.0%	3.7%	63.6%	1.9%
全県学区	生徒	51.3%	8.6%	60.3%	5.3%
	保護者	55.3%	11.2%	66.4%	6.5%
希望者全入	生徒	65.1%	10.8%	54.7%	18.0%
	保護者	66.5%	6.5%	54.2%	14.8%
中高一貫	生徒	50.4%	11.6%	62.3%	10.8%
	保護者	55.3%	12.2%	57.0%	10.3%

VI まとめ

本稿は、標記主題にかかる調査研究の結果のうち、高校入試・通学区制度の社会的・心理的影響に関して、最も著しい特徴を示した神戸第3学区と西宮学区の比較を、単独選抜と総合選抜という入試方法の相違だけでなく、生徒の自己評価による学力層の観点から複合的に分析してみたものである。

その結果、教育制度の性格について一般的に確認されているように、高校入試・通学区制度についても、制度が成立している原理そのものが、その運用および関係者の意識によって、必ずしも一義的にステイックなものではなく、弾力的、ダイナミックなものであることが認められる。そして、教育制度は、原理そのものとともに、その社会的な機能の発揮いかんによって性格づけられることも確認できる。

特徴をなす2つの学区の高校入試制度の比較において、中学生が高校入試にあたり成績以外のことで心がけていることがらが、学区によって差が認められるうえに、心がけている項目数の分布状態に大きな違いがあり、神戸第3学区では少しの成績の差で進学する高校が異なるので、学力が「ふつう」、「できる方」と自己評価している生徒により強い心理的プレッシャーがかかり、「できない方」だと自己評価している生徒には努力する意欲がもちにくい状況が生じている。また、西宮学区では、大半の生徒が総合選抜の合格圏内に入ることを目標とするが、「できる方」の生徒には私立高校との関係で、ボーダーライン層の生徒には公立高校の合格圏内に入ることへの強いプレッシャーがかかっていることが明確になった。

さらに、高校生の意識についての分析から、神戸第3学区では半数以上の生徒が中学3年の1学期から3学期にかけて進学希望の高校の変更が生じ、最終決定が中学3年の3学期が多く、入学時の進学した高校への満足度の差が県下でもっとも大きい学区になっていることも確認された。こうした状況の下で、高校入試制度の改革についての生徒・保護者の意識も一様でなく、西宮学区の「できる方」の層が現行制度の支持が低く、神戸第3学区の「できる方」の層が現行制度の支持が高い、というコントラストをなしていることも興味深い。

兵庫県下には、日本の高校入試・学区制度の各種のそれが地域的に同時に存在しているので、特徴をなす2つの学区の比較は、高校入試制度全体については部分的ではあるが、これだけでも競争主義的な教育制度が、中等教育段階の生徒に相当な心理的プレッシャーを与えていることを明確に示している。国連の子どもの権利委員会の勧告によるまでもなく、選抜機能を強く有する高校入試制度の改革は、教育改革の重要な課題であり、戦後の高校教育制度の展開と「完全な中等教育をすべての者に」という新時代の中等教育観に立脚して、「選抜から選択へ」という原理の転換をはかる方向で抜本的な改革を展望することが必要であることを痛感する。(土屋基規)